

にも碑文を露語に翻譯せるものを載せたり、余輩が *Sine-usu* 碑文もしくは磨延賤紀功碑等の名によりて本研究中に引用せるものは即ち之にして、漠北に於る當時の根本史料として重要な性質を有するものなりとす。後者も亦同氏が一九〇〇年 *Ar-Askhatu* 山の西南西 *Dolön-khuduk* (七井) の東南東 *Südzin-dawā* 岡の南側にて發見したるものなるが、其の拓本は氏の旅行中に失はれ、一九〇九年再び氏によりて將來せられたるものなりとす、墓誌は僅に九行の文字を有するに過ぎざれども、第三編、回鶻文字考(編者云、本書下卷收載豫定)に引けるが如く、回鶻に於る麻尼教流行の消息を傳ふる一新史料として亦重要な位置を占むるものなりとす、*Ramstedt* 氏の之に關する研究は *Sine-usu* 碑文の研究と共に前記の雜誌中に收めらる。今此等の新に見るを得たる史料によれば、此の篇の上に増補訂正を加へざる可からざるもの二三あり。

(一)三七四頁に於て *Uyur* なる名がトルコ族自らの史料の上に出現すること極めて稀にして、僅に突厥の默棘連可汗の碑文と、回鶻可汗の碑文とに各々一個所及び近時發見せられたる四個の史料に於て認めらるゝに過ぎざることとを述べたり。然るに茲に擧げたる *Sine-usu* 碑文及び *Südzin-Dawā* 出土の墓誌には共に *Uyur* の名を認む、即ち前者には其の北面第三行に *On Uyur* と記され、後者には第一行に *Uyur Yirmtä* (*Uigur* の地に於て)と記さる、されば余輩が此の名のトルコ族自らの史料に見ゆること少きに對して、「然も此の如きは、要するに從來彼等自らの史料の存するもの甚だ少かりしに歸因するもの」としたるは、推定を誤らざりしものにして、今後史料の増加と共に此の名の記さるゝもの益々多きを見るに至るべきを信じて疑はず、(*British Museum* スタイン文